

★★周旋家日記 24★★

「シティズンシップについて考える」 ②—学生と町内会」

乾明紀

1. はじめに

前回に引き続き、町内会をテーマに日記を書くことにしよう。筆者が担当する初年次必修科目「シチズンシップ」では、学生に町内会について考えてもらう機会がある。このマガジンでも何度か紹介しているが、この授業は知識伝達型ではないのが特徴だ（乾,2017）¹。出生前診断の是非、原発再稼働の是非、消費税増税の是非、9 条改正の是非、そして、町内会の入会是非という問答（論争的問題）を通じて学生のシティズンシップを高めていくことがこの授業のねらいである。

町内会の入会是非を考えるパートでは、「あなたは、今、住んでいる地域の自治会・町内会に加入しないかと誘われたら、加入しますか？」という問いを通じて、町内会や住民自治について考えてもらった。本稿では、この授業の取組みによって、学生の町内会意識がどのように変化したのかを紹介することとしたい。

2. 先行調査から見る学生と町内会の関係

学生による商店街の活性化やまちおこし活動についての研究は数多くあるが、学生と町内会との関わりについての研究は、管見の限り僅かしかない。単身で生活する学生と町内会との関係を明らかにした清水・中山（2009）²の研究や町内会など

身近な地域から「してもらった」経験がコミュニティ意識を高めることを明らかにした乾他（2018）³の研究など少数である。

清水・中山は、奈良市中心部の町内会長 78 名と所属大学の下宿生 101 名などにアンケートを実施し、以下の 5 つを明らかにした。

- ① 町内会と学生はほとんど接点を持っていない（町内会長の 43.4%が学生を「地域の一員と思わない」と回答。地域活動に参加した学生は 7.8%だが、地域活動に参加をしたい学生は 50.2%）。
- ② 学生が町内会に加入する機会がほとんど設けられていない（下宿をしている学生の 86.8%が町内会への加入を「勧められなかった」と回答。町内会への非加入率は 87.5%）。
- ③ 町内会長と学生の意らの識に違いが見られた（学生は「ゴミの出し方」などに気をつけていると回答しているが、町内会長は「ゴミの出し方」などに改善を要望しており、相互のコミュニケーションが不足）。
- ④ 町内会への加入と地域への意識に関連が見られた（町内会に加入している学生は地域への意識が高い）。
- ⑤ 大学に学生への生活ルールの指導が期待されている（町内会長の 78.2%が大学に期待）。

¹ 乾明紀・高野拓樹（2018）論争的問題を導入した主権者教育の試み—2016 年度 京都光華女子大学初年次必修科目「シチズンシップ」の取組み—。京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要（55）11-20
² 清水陽子・中山徹（2009）単身で生活する大学生と町内会を単位とする地域コミュニティとの

関係—奈良市中心市街地の場合—。日本家政学会誌 60(5) 499-509

³ 乾明紀・高野拓樹・朝倉眞一・三木俊和・加藤千恵（2018）論争的問題の検討によるシチズンシップ教育とコミュニティ意識の変化。日本コミュニティ心理学会 第 21 回大会 大会プログラム・発表論文集 52-53

この研究が示すように学生の町内会加入率は決して高くない。また、町内会側も大学生を加入対象者だとは見ていないことがわかる。近年、学生に町内会加入を促す自治会（例えば京都市⁴）もあるが、熱心に勧誘活動を行っている町内会は稀である。別の科目で学生が調査した町内会長のほとんどが、引き継いだ事業をこなすのが精一杯で、学生を勧誘する余裕はなかった。このような先行調査からは、町内会と学生をつなぐ仕組みの必要性が見えてくる。

3. 町内会加入の是非

現行の町内会については、肯定的な立場と懐疑的な立場が存在する。

肯定的立場である中田（2007）⁵は、町内会があることで、様々な地域課題に対応することができ、相互扶助機能が維持されてきたと主張する。また、阪神・淡路大震災において、生き埋めや閉じ込められた際の救助者のほとんどが、救助隊（公助）によるものではなく、自力や家族（自助）、友人や近隣住民（共助）によるものだったことから（日本火災学会，1995）⁶、町内会の防災機能に期待する自治体も多い。

対して、吉原（2013）⁷は、町内会は災害時に必ずしも有効的に機能しなかったと指摘する。また、紙屋（2017）⁸は、現在の町内会にある負担感や強制性は、不要な事業を多く抱えているからであり、これからの町内会は、事業をスリム化し、有志だけで組織すべきだと主張する。

⁴<http://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/000196570.html>

⁵ 中田実（2007）「新版 地域分権時代の町内会・自治会」自治体研究社

⁶ 日本火災学会編「1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」

⁷ 吉原直樹（2013）「ポスト3・11の地層から

朝日新聞デジタルが WEB 上で実施したアンケート⁹では、「必要」・「どちらかといえば必要」が45.1%、「不要」・「どちらかといえば不要」が49.4%と均衡している。現代人にとって、町内会は賛否両論ある組織であるといえる。

4. 授業による学生の町内会入会意識の変化

では、学生の意識はどうであろうか。筆者が担当した3クラスで尋ねてみたところ、授業冒頭の回答は以下（図1）であった。クラスcの結果は、筆者の想定どおりであったが、クラスa・bは加入に前向きな学生が想定よりやや多く3割を超えた（規範的に回答した学生もいるのかもしれないが・・・）。

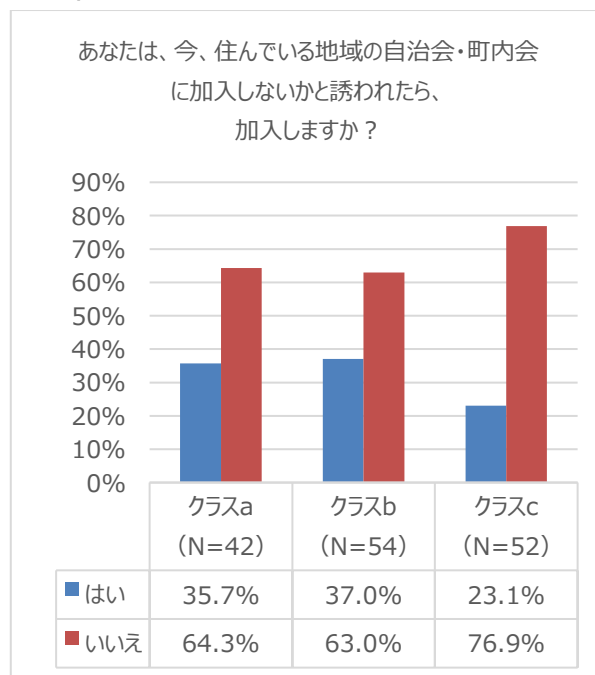


図1 ● 学生の町内会加入意識（授業冒頭）

コミュニティを再考する」. 伊豫谷登士翁・齋藤純一・吉原直樹『コミュニティを再考する』平凡社
⁸ 紙屋高雪（2017）「どこまでやるか、町内会」ポプラ社

⁹<https://www.asahi.com/opinion/forum/013/>

その後、次ページの「～授業の進め方（主な内容）～」に示した内容で授業を展開しながら加入是非について尋ねてみたところ、学生の意見は図2のように変化した。各クラスによって途中経過は異なるが、なんと全てのクラスで「はい」と「いいえ」が逆転した。

学生の意見変化が最も大きかったのは5回目の質問時だが、その前段の授業内容から町内会が持つ3つの役割（地域課題解決・地域代表性・親睦交流）への理解が進み、さらに町内会が消滅したときの弊害を考えることで、自らの生活に町内会の必要性を感じられるようになったのではないだろうか。

また、質問3回目の変化も大きいですが、この直前には、阪神・淡路大震災時の「共助」による救助事例などを提示しながら災害時の助け合いについて考えてもらった。学生は、この授業の約一か月前に発生した大阪北部地震での体験も含めて、町内会への入会メリットを具体的にイメージできたのかもしれない。

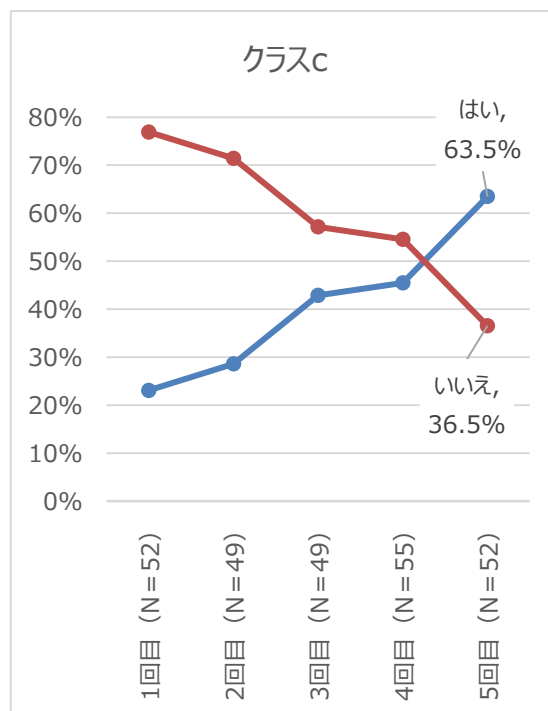
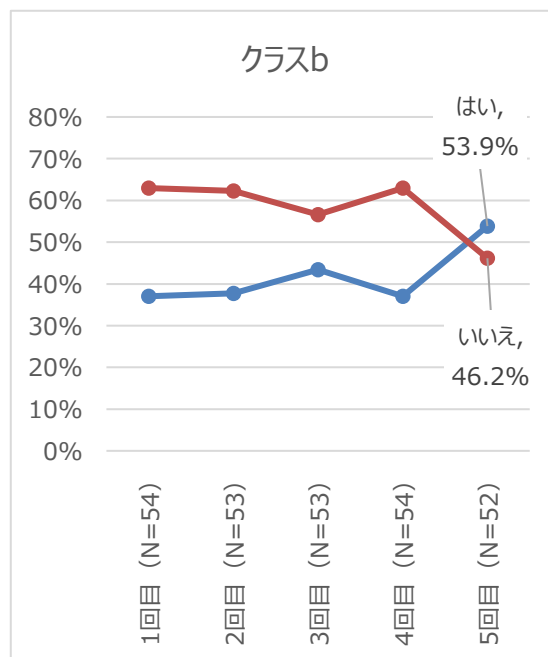
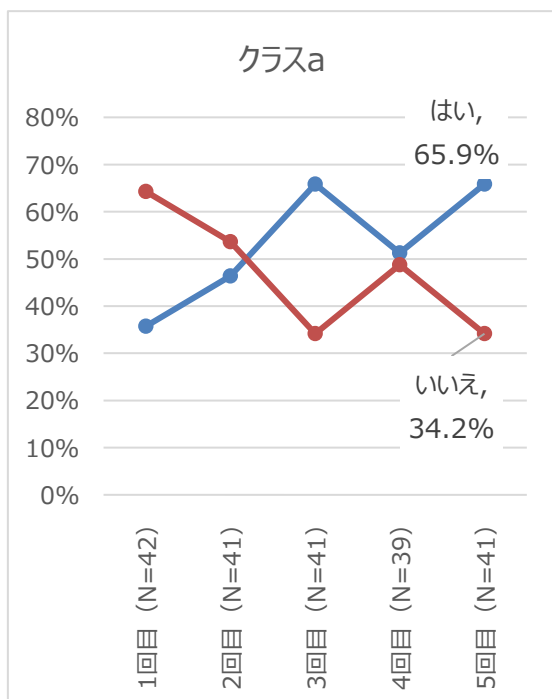


図2●学生の町内会加入意識の変化

～授業の進め方（主な内容）～

【1 講目】

★1 回目の質問

- (1) 自治会・町内会の主な活動（環境美化、住民相互の連絡など）紹介
- (2) 自治会・町内会の抱える課題（仕事量の増加、担い手不足など）紹介
- (3) 新潟小学生女児殺害事件と「見守り隊」の人員不足を紹介

★2 回目の質問

- (4) ④阪神・淡路大震災の救助割合（自力で脱出できなかった人の約 28%は、友人・隣人が救助）紹介
- (5) 災害に備えての名簿作成と町内会加入の是非を検討

★3 回目の質問

- (6) 授業のリフレクションシート記入

【2 講目】

- (7) 質問結果と前回のリフレクション内容の紹介

★4 回目の質問

- (8) 身近な公園の維持管理のあり方を検討
- (9) 町内会などによる子ども食堂や高齢者の居場所づくりの取組み紹介
- (10) 町内会の役割（地域課題解決・地域代表性・親睦交流）とその変化を紹介
- (11) 町内会が無くなった場合の地域社会について意見交換
- (12) 大阪府北部地震時の自主防災活動（茨木市郡山小学校区）紹介
- (13) 課題解決に向けた先進的な取組（兵庫県丹波市山王自治会・鹿児島県鹿屋市柳谷町内会・東京都立川市大山自治会）
- (14) 町内会の今後として「3つの選択肢」を

提示

- ① 自治会・町内会の3つの役割（親睦交流・地域課題解決・地域代表性）が、今後も維持されるように活動する
 - ② 活動（参加・加入）できる人たちが、できる範囲で、地域に必要な活動をする
 - ③ 自治会を解散する
- (15)解散した自治会（東京都調布市の「杉森自治会」）紹介
- (16)町内会に変わる地域自主組織（島根県雲南市）紹介
- (17)(14)に示した3つの選択肢の中から、これからの町内会のあり方を検討（結果は図3）
- ★5 回目の質問
- (18)授業のリフレクションシート記入

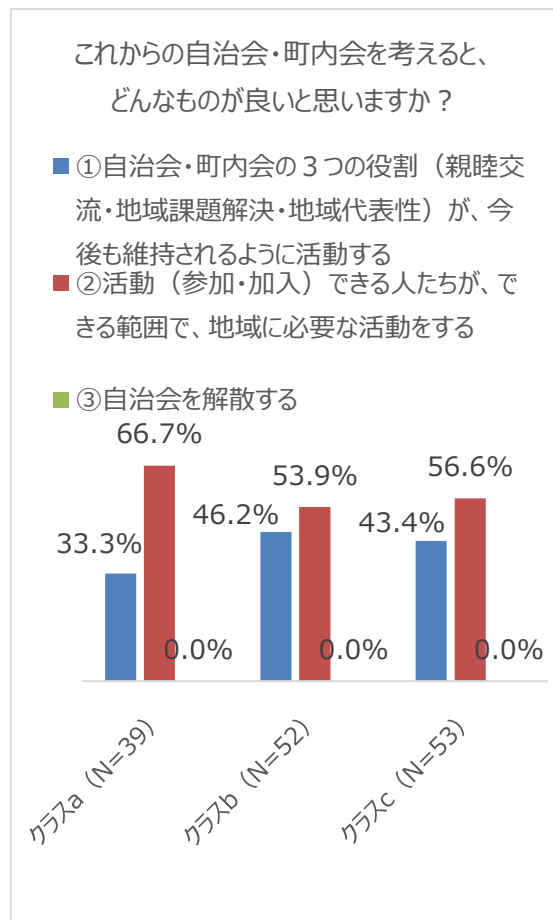


図3 ● 学生が考えるこれからの自治会の役割

5. 学生を地域の一員として、町内会に迎えるためには

今回の調査を通じて、町内会への入会に前向きな学生は、潜在的に 2～3 割存在することがわかった(図 1)。また、90 分×2 回の授業であったが、町内会について考えてもらうことで、その人数は倍増したということである(図 2)。これらの人数は、町内会の活性化を考える人々にとって、勇気の出るものではないだろうか。

入会理由で最も多かったのは、クラス b は生活上のメリットで、クラス a・c は災害時の助け合いであった(図 4)。大阪府北部地震の影響もあるだろうが、これらの機能が理解できるよう学生に伝えていくことができれば、学生を地域の一員として、町内会に迎えることができるのではないだろうか。大切なことは、町内会(地域)と学生のコミュニケーションとそれを通じた相互理解の深化であろう。

今後はこれらのデータを参考にしながら、学生と町内会をつなぐ具体的なマッチングの機会を検討していきたい。

日記はつづく

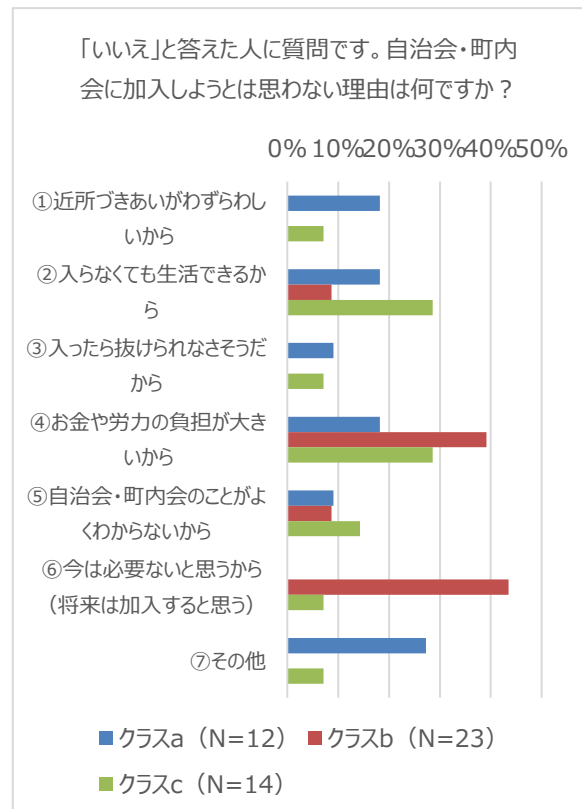
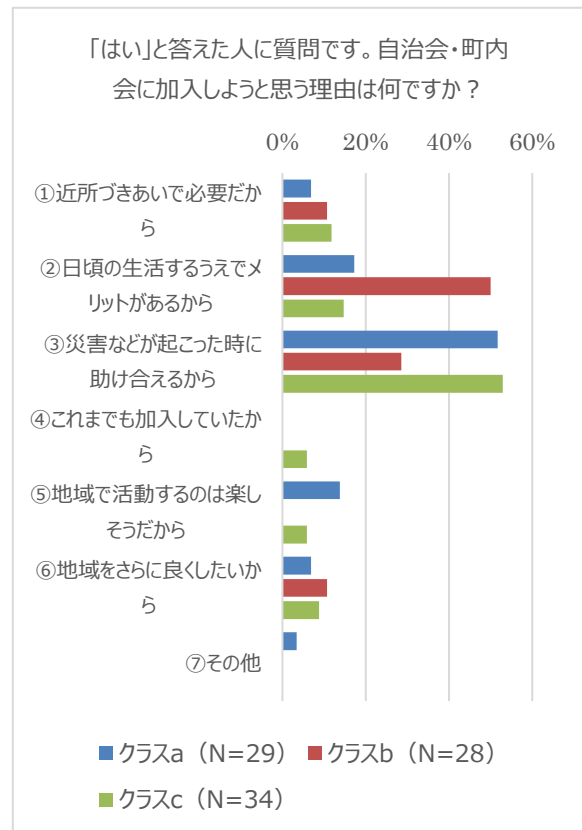


図 4 ● 学生の町内会入会是非の選択理由